平和の意味を考える

城南中学校　二年　楠田　慶俊

毎年、八月になると「平和を願って」というフレーズをよく耳にする。今年もたくさん聞いた「平和」という言葉について、僕は考えてみた。

僕の曽祖父は、百四歳まで元気に僕と暮らしていた。いつもニコニコ笑っていて僕にも優しく接してくれた。百歳を超えると、たくさんのひ孫たちの名前を忘れないように毎日メモに書いていた。そんな風に忘れっぽくなっていた曽祖父だが、戦争体験だけは鮮明に覚えていて、僕によく話してくれた。

「赤紙が来て、スマトラに行ったんだよ。行ったときはすでに戦争は終わりかけていて、武器を持ったことはなかった。帰るときに現地の人がたくさん手を振ってくれて、とてもうれしかった。でも、たくさんの友人や親戚が死んでしまった。食べるものもなくて道に落ちているものも食べた。その時は日本を守るために戦うことが当たり前の世の中だった。みんなそう思っていた。大好きな日本を守ることは大切なことだ。ただ、武器を持っては絶対にいけないんだよ。なんであの時そう思えなかったんだろうと、今でも後悔しているよ。」と。

今の僕を取り巻く環境は、言ってみれば「平和」そのものだ。学校は楽しいし、勉強もそこそこ楽しい。無理やり行かされている感たっぷりの塾も、そこそこ楽しい。友達と遊んで携帯を見て、オンラインゲームをする。僕のくだらない話で家族みんなが笑う。「なんて平和なんだろう。」とつぶやきたくなる人生だ。だから曽祖父の言う「武器を持ってはいけない。」ということは、当たり前のことすぎてなんだかピンとこなかった。でも、世界はどうだろう。世界では、今も武器を持って戦っている人がいる。「国を守るために」と戦争をして、武器を持ち、人が人を殺している。

中学生の僕も自分、家族、友達を守るために戦わなくてはならないことも時にはある。例えば勉強。これを頑張ることは、自分との戦いだ。友達と喧嘩することもある。これもある意味では戦いだ。携帯やゲームのやりすぎで家族に怒られ、反論することも、悩み事と戦うこともある。こんな戦いの中で、人の心を知らない間に傷つけてしまっていることもあるだろう。しかし、だからと言って、自分や誰かを守るために武器を持って戦おうとは思わない。なぜなら、人間は「言葉」という、人間にしかない盾を持っているからだ。言葉を使って、お互いの考えを伝え合うことができるのに、武器なんているのだろうか。

僕はまだ中学生なので、世の中のことでよく分からないことがいっぱいある。こんな僕一人が平和を願っても世の中は変わらないだろう。だから願うだけではなく、実際に行動して

いかなくてはならないと思うのだ。

それは、特別なことでなくていい。まずは家や学校という僕の周りの小さな世界の平和を守ることだ。例えば、友達が困っていたら声をかけて助ける。悩みがあったら話を聞いて、寄り添う。喧嘩したら話し合って解決策を共に考える。そうやって、みんなが居心地の良い学校にしたい。そして、僕を育てるために働いている両親、忙しい両親に変わって僕を育ててくれている祖父母、学校を楽しいと思える場所にしてくれている先生、僕の友達に感謝の気持ちを持つことだ。そのことが、きっと僕の小さな世界を平和にしてくれると思うのだ。

八月十五日、終戦記念日。来年もこの日は巡ってくる。その日も改めて僕は平和を願うだろう。何百年と世界中の人々が平和を願ってきたが、未だに実現できていない。簡単なことではないと分かっている。世の中は変わらないかもしれない。でも、僕は願い続ける。「願う」という僕の小さな行動が大きな奇跡を呼ぶかもしれないのだから。